

阿部政恒研究試論

—北海道時代を中心に—

室 田 保 夫

はじめに

阿部政恒という人物とは何者なのか。阿部は北海道樺戸本監と網走分監の教誨師として就き、いわゆる「北海道バ
ンド」⁽¹⁾の一員として紹介されてきたが、これまで彼の出自から青少年時代、同志社時代、その後如何なる経緯の下
で北海道樺戸本監の教誨師に就いたか、かかる経緯について、ほとんど解明されてこなかった。キリスト教教誨師と
して阿部の名前が挙っていても、彼の具体的な業績についての研究は皆無に等しい状況であった。その原因を辿ると
三四歳という若さで天に召されていったという生涯が大きな要因であったと思われる⁽²⁾。しかし阿部についての史資
料が遺族の方から同志社大学に寄贈され、彼の生涯をたどる研究の利便をうるようになった⁽³⁾。その資料は同志社社
史資料センターで整理されており、写真や日記等の貴重なものもある⁽⁴⁾。この阿部政恒関係資料を駆使しての全体的
な解明は今後の課題としなければならないが、一部この資料を利用し、彼の生涯、とりわけ北海道時代を中心として
論究していくことにする。

同志社時代、同じ学窓時代を過ごした留岡幸助は阿部が天に召された時、「長陽阿部政恒君逝く」という追悼文を執筆している⁵⁾。ここで彼の短い生涯を概観しておくためにも、少し紹介しておくことにする。阿部は留岡に半年近く遅れて、一八九一（明治二四）年一〇月に樺戸本監教誨師に就く。その後網走分監の教誨師に赴任し、九四年一〇月、病気を理由に辞職するまで約三年の間教誨師として働いた。

留岡は先の追悼文において「北海の飛報は長陽阿部政恒君の長逝を齋しぬ、余は数日前に至るまで君が宿痾を養んが為に明石の浦に保養せんとてそが準備に多忙なりしを知れり、然るに君は遂にその目的を達せず中途にして遠逝せり、君夫れ如何ばかり憾み多かりしぞ、余は之を思ふだに断腸の種ならざるはなし」と。そして「君資質温順にして謹直、事を為す密に、約を守る堅く、学生としては常にその主坐を占め、伝道に従事するや能く精能く忠、君遂に愛妻二子を残して遠逝せり、余は逝きし君を惜むと同時に彼が遺族の為に断腸せざらんとするも能はじ、君を天に招きたる慈愛の天父は必ずや彼が遺族の上に無限の恩恵を垂させ給ふを信ず、これ余が彼の遺族に与ふる最大の慰藉たらずんばあらず、謹んで君の長逝を傷む」と弔している。留岡にとって文末に「君の親友」と記しているように、惜別の情が窺い知れる悲痛なものであった。

さて、この論文は阿部政恒の生涯、とりわけ彼の北海道時代を中心にして、短いがキリスト者として懸命に生きた生涯を辿ることにある。そのために従来から北海道行刑史やキリスト教史関係の著作や史料を参考にし「阿部政恒関係資料」や北海道行刑史に関するもの、『同情』（『教誨叢書』）、『獄事叢書』『基督教新聞』『同志社文学』『大日本監獄雑誌』等の紙誌、『新島襄全集』の著書等を利用して、北海道時代を中心に、阿部の生涯の概観と思想を辿ることが第一の目的である⁶⁾。限られた紙幅であり、詳細な事績については別稿に譲るとして、これまで殆ど解明されていなかった北海道バンドの一員としての阿部の事績を中心に論究していく。さしあたり彼の出自を確認し、思想形成に

大きな影響を受けた同志社時代からみていくことにしよう。

一、同志社時代を中心に

(一) 同志社入学まで

阿部政恒は一八六四(元治元)年八月一日、山口県阿武郡木幡村に生まれた。父は長野政直、母はヒデである。「阿部政恒関係資料」の中に「記念之筆跡 長陽外史^⑦」という和綴の一冊があり、経歴の多くはこれに依拠している。政恒は幼名孫太郎と称した。奇しくも親友でもある留岡幸助と同年の誕生である。彼は六九(明治二)年、即ち五歳の時、藩士香取熊之助の養子となつてゐる。養父は「千城隊に加はりて東北に従軍し越後に於て戦死す依て其家を嗣ぎ香取常教と称す」(「記念之筆跡」)とある。長州という土地柄、千城隊に入隊したと思われる。阿部は七歳の時、藩の老儒間島某から学んでいる。若い時期の文章から彼の学識ある才能が窺えるが、ここでの学びがその基礎となつてゐるのだろう。ちなみに、七二年に学制が敷かれ、翌年、九歳で小学校に入学する。

一八七五(明治八)年、実家で開墾の計画があり、厚狭郡美和村に移住する。この時父の意志により香取家より引戻され開墾地に入ることとなる。これを機に政恒と改名した。七六(明治九)年五月七日 実父が病没し、同年九月二七日「実兄阿部研三の養子となる同年十月に養父に従つて京都に上り暫く中絶せし学校教育を再び受く^⑧」ことになる。翌七七年三月、「小学生徒学業天覧の旨降り余亦下等二級生より選抜されて、其榮を受く」こととなる。そして「有栖川親王代見し玉ふ時に金五十錢下賜 同年夏再び天覧の旨あり上等八級生にて天顔に咫尺^⑨す」とあり、その時も金老円下賜されており、少年時代から彼の優れた才能の一端が窺える。

一八七八（明治一一）年、中学校に入るが、翌年七月に養父母が死去し退学せざるを得なかった。そして八〇（明治一三）年四月、大阪藤田組に入り職に就く。同年一〇月からは大阪府四等巡查を拝命し西長堀警察署詰を命ぜられ、翌年三等巡查となっている。さらに兵庫県四等巡查を拝命し神戸警察署詰を命ぜられている。八二年、神西小学校補助員、同年一〇月八日七等訓導を拝命する。翌一六年四月六日、六等訓導を拝命しており、中学校を退学してからは警官や教師を歴任した。

阿部はこの頃キリスト教に関心が生じたようで、たまたま大阪にて天主教信者からキリスト教を学び、神戸に移りプロテスタント信者の友人の誘いから神戸教会に出入していた。一八八三（明治一六）年一月四日に神戸教会で松山高吉牧師より受洗した。⁽¹⁰⁾ この回心の決断は彼の人生にとって重要な出来事であったが、その精神的変革の詳細は詳らかではない。洗礼を受けた神戸教会は組合教会系であり、その後、関係の深い同志社入学を果たすことになる。

（二）同志社入学

阿部が同志社の別科神学科邦語神学課程に入学するのは一八八四（明治一七）年九月のことである。留岡が同様の課程に入学するのは翌八五年一月のことで、入学の時期は違うが、卒業は同時期である。⁽¹¹⁾ 二人が別科神学科時代から旧知であり、同じ学舎の同じ課程で学んだことで二人の友情が育まれたことは想像に難くない。当時同志社は新島の大学設立運動にも象徴されるように、日本初の私立大学を創設するという同志社の新構想に向けて教員、学生ともに熱気に溢れた時代であった。⁽¹²⁾

阿部は当然のことながらキリスト教伝道の為に各地に赴くことも多々あった。一八八五年には、夏期休業中に摂津西宮に於ける伝道、翌年には神戸教会にて伝道補助をし、八七年には三重県津にて伝道、伊勢、二見浦を遊覧した。

同志社学生時代、キリスト者の夏期伝道は通例のことであった。こうして阿部は神学や他の学問を学びながら、京都同志社で青春を謳歌し、新島の「良心教育」を体得していった。¹³⁾

(三)『同志社文学』にみる阿部の論文

同志社学生時代、阿部は当時刊行されていた『同志社文学』¹⁴⁾に数篇投稿している。その論題は「公私ノ弁」(一号、一八八七・四・二〇)、「キリストノ性格ヲ論ス」(四号、八七・七・二〇)、「バプテスマのヨハネ」(八号、八七・二・一七)、「基督の性徳」(一二号、八八・五・三〇)等である。これらから学窓時代に抱いていた阿部の抱く思想の一端が窺える。まず彼の最初の論文と考えられる「公私ノ弁」をみておこう。

阿部はこの小論の冒頭「天下ノ事紛々擾々トシテ一ナラス雲ノ如ク起リ龍ノ如ク躍リ風ノ如ク舞ヒ麻ノ如ク乱レ蟬ノ如ク集リ蒸騰奔散其跡更ニ尋ヌベキナキガ如シト雖モ之ガ綱紀スレハ公私ノ二事ニ他ナラズ」として、古今よりその歴史を「三階の進化」、即ち「君臣の時代」「社会と己人の時代」、そして「第三時代」の進化を見ていくと把握する。言うなれば、第一は君主一人の権利による社会であり、第二の時代は「世運一転し人智開発シテ権利義務ノ何タルヲ知り社会ノ社会タル所以ヲ了得スルニ至リ」た時代であり、今、一九世紀今日の時代である。しかし、これで満足するものではない。今は第二期と第三期の曙に到達した時代であって、この曙、東天紅の希望の時代であると期待する。そして次のように記す。「今ヤ此時代ニ於テ私事ノ公行彼ガ如キヲ見公権ノ全勝セサル此ノ如キヲ見テ奮然勃興七寸ノ草履ヲ踏テ天下ヲ縦横シ三寸ノ舌刀ヲ振フテ迷信ヲ論破シ身ヲ殺シテ救ク者ハ誰ソ雲晴レ雨収マリ瘴氣地ヲ払ヒ四顧朗然仰テ天ノ高ヲ望ミ煦々タル和光薫郁セル軟風ノ中ニ徜徉シ累々タル文明ノ美果ヲ楽園ノ中ニ摘取スルノ一新世界ヲ現出セシメンカ為メニ身ヲ投シテ真理ノ犠牲トナル者ハ何人ソ嗚呼今日ノ時勢ハ此英土ノ四方ニ起

ラン事ヲ待テリ」と。

次に「基督の性徳」（一三三号、八八・五・三〇）という論文では以下のように論じている。

基督の一生に於て最も驚くべきは其遭遇の奇変なる事なり三年の光陰は事業を企つるものに取りては電光の一閃に似て事の未だ端緒に就かざる中既に過去の歎なき能はず基督が永遠の大業を立玉ふや実に此短年月の間にあり而して其間東奔西走席暖なるに違あらず枕するに所なく或は湖辺民に教を説き或は山上に人を飽かしめ朝に殿に入りて道を講し夕に出て、病る者を恤み群羊の牧者なきを見ては悵憫之を哀み偽善者の跋扈に逢へは叱咤之を責め屢適人の詭謀に遇ひ侮慢者の罵詈を受け郷里に虐待せられ都府に暴遇せられ至る所迫害と誘惑の中を通過せざるを得ず其初めや名声高く揚りて多民来り就き其終りや衆人棄る所となりて極刑に死すホサナの歓声は今日十字架に釘せよとの叫びに變し踰越の夕雨の為には死に迄も行かんと断言せし親愛の弟子も鶏鳴未だ三呼せざるに既に吾彼を知らすと誓ふに至れり嗚呼何ぞ其遭遇の奇変なるや人生行路の難山にしもあらず水にしもあらず人心反復の間にありとは実にイエスの一生を形容したるものと云ふべし

阿部はこうしたイエスの言動を紹介し、ひいてはそれを我々、自分の問題として考えようとする。しかしイエスの言説や生き方はそう容易なものではない。『父よ今我をして爾と偕に栄を得させ玉へ』と嗚呼世界は広く人類は多しと雖も『清潔にして不善なく織垢なくして罪人に遠かり且天よりも高きもの』にあらざれば誰か此語を発し得るものぞ』と論じている。阿部の二つの文章のみで、彼の思想と即断していくことは慎まなければならないが、二〇歳過ぎた彼はイエスの生き方に倣いキリスト者として生きていく基本的な態度があったことを理解しておきたい。

(四) 同志社卒業後―新島と阿部、そして浪花教会牧師

こうして四年の学びを終え卒業を迎え、阿部は卒業生仲間と一緒に新島宛に次のような連名書簡を差し出している。その連名者とは阿部のほか留岡幸助、塩見孝次郎、藤田国松、片桐鱗太郎、富田元資、中山光五郎、高橋優、坂田忠五郎、江波亀四郎の一〇人である。

……略……小生等今より社会に出て、主の為に畢生の力を尽し優渥なる神恩に答へ、併せて先生の御誘導緒教師の教育の高恩に報ひん事を希望致居候、小生等の前途遠遠艱難途に当る事二御座候得ば猶将来も先生の御侍と御教導とを仰度候、今や秀麗なる京都の山水に別れ親炙せる我同志社を辞せんとするに方り胸間万緒の感情に一端を述べ、併せて希望する所を陳し、先生の座下二呈候、何卒小生等の心緒御推量被下度候、願くハ先生、主之為め、国の為め、益御保ありて永く御勤勞なし下されん事を、頓首謹言 六月三十日

新島先生閣下⁽¹⁵⁾

この書簡は卒業生有志の卒業にあたっての決意表明的なものである。内容から当時の新島と教え子たちとの絆の強さが窺え、学生を大切にしたい新島、それに応えようとする教え子の覚悟が窺えるものである。新島の教えを抱きキリスト者として覚悟し社会に出て行くことになる。卒業後、その夏、八月四日に阿部たちはキリスト教の会合のために比叡山に登る。その途路、京都八瀬村にて留岡は偶然阿部に遭遇し、日記に「互ニ喜ベリ。又神戸教会員安永寿、山岡某、原田悠三郎諸氏ト初テ面会セリ⁽¹⁶⁾」と記している。

阿部は別科神学科を卒業し、洗礼を受けた神戸教会と関わりを持っていた。一八八五年に神戸教会に赴任した原田

助牧師（一八六三—一九四〇）は、八八年八月八日、在任のまま米国に留学することとなる。「記念之筆跡」には「原田氏洋行中、代理を為す」とある。原田は翌年八月牧師職を辞任している。⁽¹⁷⁾阿部は八九年、土佐にて半月間伝道し、婦神の後、女子伝道学校（後の神戸女子神学校）並びに保姆伝習所教授を囑託されている。

ところで、同志社在学中から阿部は新島と書簡を交わしているが、卒業してからも書簡のやりとりをしている。その一例をみておくことにしよう。阿部がちょうど原田の留守中に彼の代理を務めるため、神戸に起居していた時であった。新島は一八八八年一〇月三〇日、神戸に居る阿部に次のような書簡を寄せている。

只今貴書落手仕段々御心配被下候条深く奉拝謝候、右借家之事ニ付今朝川本老兄迄一書拝呈し、小生も帰京後昨日ベレー師之診察を受候に、来十一月ハ神戸の氣候ハ暖和二過キ小生健康上ニよろしからず、却而西京之少し冷氣を帯たる空氣カ小生ニ助けと可相成候間、是非十一月中丈ハ西京ニ止まり十二月より神戸ニ趣くへき旨被申度、先右之事ニ相定候由申上置き、又借家主ニ対し如何なる所分を要し候や、其点も一応御尋申上置候間、何卒川本兄方之御迷惑と不相成様御取計被下度、此段奉希候也

十月卅日

阿部政恒兄

尚々、長田兄ニ御好意之程宜しく御謝し被下度候⁽¹⁸⁾

襄

新島は阿部らに神戸住まいの家を依頼していたが、一二月から神戸での静養の件を相談した内容となっている。この新島書簡の翌三一日、阿部は新島に次のような書簡を認めている。長文の書簡には一致、組合の教会合併のこと等

が記され、彼の抱いていた思想の一端も披見できる。

新島先生閣下

一致組合両教会合併事件ニ付、懇切ニ御意見御漏し被下、併セテ数ニモ入ラヌ小生ノ鄙見御尋問被下候事感銘ニ堪ヘス、小生在校ノ砌ハ先輩諸氏ノ説ヲ丸吞ニシ漫然合併賛成説ヲ有シ居候処、当地ニアリテ教会ノ事務ニ従事スルニ至リ、両教会合併事件ノ大切ナルヲ感じ教会ト相談し憲法草案調査委員三名ヲ撰挙シ小生も共ニ該草案ヲ調査イタシ、其研究漸ク進ムニ従ヒ、益欠点ノ多キヲ加ヘ覚ヘ、到底非常ノ修正ヲナスニアラサレハ合併ヲ遂クル能ハス、サリナガラ吾人ノ意ノ如ク修正スレハ一致教会ノ制度ト相距ル事益遠キニ至ルベケレバ此度ノ合併論ハ遂ニ成就スル能ハサランカト窃ニ思惟シ居リ申候、然ル処関東ノ教会ノ意見ヲ聞ニ及ヒ愈鄙見ヲ堅フシ、吾人ノ自由ト教会百年ノ光榮トヲ犠牲ニシテ目下ノ安ヲ謀ルハ良心ノ快トセサル処、決シテ神ノ聖旨ニアラサルベシト信スルニ至リ候……略……何ニシテモ此憲法ハ文明ノ潮勢ニ反対シ社会進歩ノ理ニ逆ヲ者ト被考候ニ付、仮令一致教会合併ハ可望トスルモ、此憲法ニテ合併スル事ハ成し得サル処ニ御座候、当神戸教会ニテハ過ル日曜日全会一致シテ来月ノ大会議ヲ延期スル事ニ決議仕候。……略……新憲法ハ福音ノ真理ノ發達ト共ニ併立スル事能ハサルカ故ニ不可ナリ、会進歩ノ大法ニ悖ルカ故ニ不可ナリ、福音ノ真理發達ニ並行シ得サル者ハ今日ヨリ之ヲ棄ツルニ於テ何ノ不可アラン、況ンヤ社会進歩ノ大法ニ反スル者百年ノ後禍害アルニ於テオヤ……以下略……

十月卅一日

政恒⁽¹⁹⁾

阿部は卒業後、神戸教会を助けている。原田牧師の不在ということもあって、こうした一致と組合教会の合併とい

う課題にも関心をもたざるを得なかった。阿部は当初の考え方が変容していったことを率直に認め、自己の合併反対の根拠も明確に伝えている。新島はよく「書簡の人」ともいわれるが、阿部ら教え子とも意見の交換をしていたことが窺える。しかし、尊敬する新島は一八九〇年一月、大磯にて帰らぬ人となった。

阿部は一八九〇（明治二三）年四月、浪花教会の招聘により大阪に移住する。浪花教会の同年四月の記録に「阿部政恒氏を聘して牧界の事を託した」（四〇頁）とあり、増野悦興の後任に就いた。七月五日、教会は新会堂の建堂式を挙行する。その式典において、阿部は「奉堂祈祷」の役割を担い、奨励と祝祷は宮川経輝が行った。来会者四〇〇余名、午後一時より凌雲閣にて八〇余名の参加にて開催された。九〇年一月一日、米倉階子との結婚式を浪花教会堂で挙行している（翌年二月四日入籍）。階子は愛媛県の出身で、八八年一月二五日、愛媛県今治教会で洗礼を受けている。²¹

一八九一年一月一日、実母長野ヒデが永眠し、西成郡長柄墓地に葬った。しかし阿部は同年五月、病気を理由に浪花教会を辞し、五月二八日、日向国児湯郡美々津上町近藤昇一氏方に秋迄滞在している。その年の秋に阿部は日向から教誨師として渡北することになる。

二、監獄教誨師として

（一）樺戸監獄教誨師

阿部が北海道に渡る当時の『基督教新聞』²²には「本邦監獄にては専ら仏教僧侶を教誨師に採用し来りしが曾て旧空知集治監にては憲法の正條信仰の自由に基き耶穌教牧師を採用して囚徒を教誨せしめたるに感化の力著しきより今

度北海道集治監典獄大井上輝前氏は各分監の教誨師を改めて同教牧師を聘する由」という一八九一（明治二四）年一〇月一四日の『北海新聞』（六八七号）の雑報記事を掲載し、続けて「当道全体の教勢は一般に活興せり神の祝福益我北海道の上に垂れ玉はんことをアーメン」と報じている。そして『基督教新聞』には以下のように阿部を採用した内容が掲載されている。

先頃樺戸集治監にては囚徒深井卓爾氏等外三十有余名の連署にて耶蘇教の教誨師を入れられん事を請願致されしやに風聞致せしが此度愈日向美々津より阿部政恒氏を教誨師として雇はれ同氏令聞も去十五日函館に着し十七日樺戸に向け出發せられたり又兼て同地へ幼稚園を設けらるゝとの噂ありしが夫等の参考にや阿部氏が当地へ来らるゝ途次神戸静岡東京等にて最寄の幼稚園を參觀せられし由⁽²³⁾

これから窺えることは囚徒三〇数名の連署にてキリスト教教誨師の要望があり、典獄大井上は受け入れを英断した。そして阿部に白羽の矢がたち、彼が宮崎から樺戸へ招聘された。新聞は「風聞」と断つてはいるが、大井上は釧路での原胤昭、空知での留岡の仕事内容からキリスト者の招聘を決断したと思われる。確かにこの大井上の英断は換言すれば、従来から働いていた仏教教誨師を罷免してのものであり、仏教との軋轢を生むこととなる。⁽²⁴⁾ ちなみに阿部の「記念之筆跡」によれば、宮崎県児湯郡に暫く滞在した後、一〇月三日、同地出發、今治、神戸、静岡、東京、青森、函館、市来知を経て同月二六日、樺戸郡月形村に着した。

こうして阿部は北海道樺戸本監に出頭し教誨師を拝命するが、棒給四〇円の給与であった。そして一八九一年秋から彼は樺戸本監教誨師としての仕事に就いた。同年五月の留岡の空知集治監教誨師、秋の阿部の網走分監拝命となり、

その後松尾音次郎、大塚素、水崎基一ら同志社出身者が集治監教誨師として赴任していく流れとなる。

この赴任当時の様子を留岡の日記から少しみておこう。留岡は一八九一年秋、「羈旅漫録⁽²⁵⁾」として調査の旅を続けていたが、彼の空知市来知に帰着する時と阿部が樺戸に着する時と、ほぼ合致した。一〇月二七日の日記には「此夜北海毎日新聞ヲ見シニ、阿部政恒兄去ル二十日頃樺戸本監ニ赴任セルガ如ク見ヘタリ。為ニ明日ノ旅行ハ市来知ニ道ヲ取ラズシテ、樺戸ニ出ツルコトニ決ス」とあり、同月二十九日には「此夜阿部政恒氏ニ面シ其無事ナルヲ祝シ、且ツヤ教誨上ノコトニツキ種々ト話ス。共ニ此内ニ宿ス」とある。一月七日阿部の旅宿に投じ、翌八日の日記には「午後一時集治監内ニテ、教誨ヲ傍聴ニ行ク。阿部君真ノ幸福ヲ簡明ニ解カル。来囚九百有余静聴セリ」とある。一二月二日には「此日小野田卓弥、阿部政恒ノ両兄ヨリ、同情雜誌、保護会ノコトニツキ除々進捗スル様申シ越サレタリ」、一二月八日には「夜札幌竹内種太郎君ノ所ヨリ手紙来ル。網走へハ断然行カズト。残念ナカラ致方ナシ。御旨ナラント断念ス⁽²⁶⁾」と記されており、翌九二年一月五日には「阿部君ヲ霞町ニ尋ヌ。夜ハ大井上君ノ許ニ行キ、深夜ニ至ル迄保護、同情ノ二件ニツキテ相談ス。万事能ク整ヘリ十二時阿部君ノ宅ニ帰り、祈ヲ以テ臥ス」とある。翌日も大井上の所へ阿部と行き「更深ケル迄談ス」とある。こうして阿部は樺戸集治監教誨師に就き業務を遂行していくことになる。樺戸では数ヶ月の勤務であったが、大井上や近傍の留岡から多くの事を学び、四月に網走分監に配置が変わる。

(二) 網走分監教誨師

阿部は一八九二（明治二五）年四月四日、網走分監詰となる。五日の留岡日記には「此日阿部君網走へ転任ヲ命ゼラル。夫婦連レニテ来ラル。午後ヨリ共ニ監獄へ伴ヒ、説教ヲ病監ニ舎ニテ依頼ス。……略……此夜阿部君ト監獄運

動上ニツキ種々ノコトヲ談ス」とあり、翌日には「此日九時ヨリ阿部君札幌ニ向ツテ出立ス。ステーション迄送りテ行ク」とあり、かくして阿部は網走分監の教誨師として働くこととなる。⁽²⁷⁾

そもそもこの網走分監は一八九〇（明治二三）年三月、釧路監獄暑が網走より北見国網走郡能取村に収容所を設置し、それを網走囚徒外役所（後に囚人宿泊所）と称したことに淵源する。翌年六月二十七日、「この土地營造物を襲用し、北海道庁令第二十六号を以て釧路集治監の分監が設置され釧路集治監網走分監と称した⁽²⁸⁾」。この分監の囚徒たちに課せられた大きな外役事業は網走より北見国石狩国境に至る延長四〇里の国道開鑿事業であった。つまり囚人を利用して中央道路を建設するという国家政策の強制労働であった。これはまた難工事で多くの病人や死者を出した過酷な労働であった。その教誨師として彼は経験が浅いが赴任することとなった。

その年の夏、阿部は、留岡と同様に網走分監から北海道東北部を廻る旅をしている。それを「北見旅行の記」として、二回にわたって報じている。⁽²⁹⁾ その文頭に七月下旬に腸加答兒を病み「臥床旬日を経て起つを得、友人と共に北見旅行を企つ」とある。完全には回復しなかったが、医師の許可を経て八月六日、友人四人と共に出立した。友人は皆官辺の人にして彼等は視察を、阿部は教誨を目的として旅立ち、馬に乗っての旅であった。その行程を彼の報告に基づき掲げておく。「能取山道」↓「馬をオコーツク海浜に立て、魯領の天を望む」↓「能取湖」↓「常呂村」↓「猿間湖」↓「湧別村」↓「湧別原野」↓「山中知己に遇ふ」↓「十一の小屋」↓「国境の山、気清く山風冷なり」、そして「ルベシベ」（瑠辺蘂）を過ぎこの旅も終わりを迎える。「今や開鑿工事其九分を竣へ余す処只数町のみ、網走分監の囚徒此工事に服役す、余等阪路の頂に登り涓々たる涑水を掬して憩ふ事霎時、気清く風冷にして心爽然たり、猶進んで囚徒服役の処に至り之を視察して帰る、此夜十三の小屋に宿り翌朝教誨す」と様子を伝えている。かくしてこの旅日記を次の様な文章で終えている。

此行七日を費し往復八十里の道程を馬蹄にて踏破せり、嗚呼北陲の地内地人の踏まざるもの茲に数千年、其間只アイヌの髯將軍榛莽の間に罷熊と格闘せし事あるのみ、然るに今や文明の澤此処に及び、道路通じ移民集まらんとす、帝國の爲め賀すべきの至りなり、只恐る敬神清潔の民来りて拓殖するにあらずんば、此肥沃の土は遂に卑陋なる徒の巢窟とならん事を、我敬愛するクリスチャン諸氏よ、諸氏にして北海道のピューリタンたるを期し、移民の祖先となりて良風美俗を起し、万年の基礎を堅ふせば、北海道の益のみならず、実に我國の福祉と云ふべし、地靈亦必ずや千歳始得真知己を歌はん

この工事は二年以上、突貫工事として多くの囚徒たちの外役労働が強行されてきた歴史があるが、この文章から「帝國の爲め賀すべきの至り」とあるように、多くの犠牲を伴って成り立っているという視点で、この時期の阿部の言説に見られない。留岡は一年前にこの道を辿った時、水腫病に罹病し苦悶する囚徒に同情し、思わず祈らざるを得なかったが、囚人労働に対して阿部は如何ように思ったのだろうか。北海道開拓はこうして道路工事の開鑿が囚徒の犠牲的労働の上に展開されていった結果、為されていったものである。それは文明化への一里塚としてあることは事実だが、多くの代償が払われた事実は無視できないだろう。ましてや、網走分監から囚徒を送り出した歴史もあり、彼はこの地で囚徒の前で如何なる教誨をしたのだろうか。

阿部の勤務した網走分監について、一八九二（明治二五）年一〇月の新聞に報告された記事があり、その記事には「網走分監は北海道集治監の一分監にして、拘禁せる所の重罪囚目下殆ど八百名あり、監の傍ら川に傍ふて官舎を設く戸数八十有余、其の光景宛然たる封建時代の『キヤツスル』なり、柚木製造所は山田愼氏の私有にして、多数の職工と囚徒とを使役し蒸気機関を運転して燐寸の柚木を製造す、毎月之を大阪に輸送し四箇の燐寸製造所に供給すと云

ふ、朝夕鳴らす所の汽笛、りゅうりょう 唳として静寂なる空気を破り、分館の號鐘亦之に和して山中の一部落に一の活気を与ふ⁽³⁰⁾とある。ちなみに文中にある柚木燐寸製造所は当時市街と二〇町ほど離れた山間に位置し、網走分監とは網走川を相對する大建築物であつた。この製造所でも囚徒が外役労働として利用されていたのだろう。

ところで当時の阿部の教誨事業について、原胤昭が小河滋次郎に宛てた信書、「空知にも三人の仮出獄者有之壹人は北海道に居住する親族の許に奇遇し二人は留岡教誨師方に寄食し農業に従事せしめ候由に御座候網走にも四人の仮出獄者を出し是れは何れも阿部教誨師に於て夫々心配致し居候事と存候云々」という文面を紹介し、「嗚呼何そ其熱心なる全国幾多の教誨師、此熱心を以て斯道に尽す者果して幾何かある」と報じている。北海道での原胤昭や留岡、阿部らキリスト教教誨師の熱心な実践に対して、賛意を送っている⁽³¹⁾。教誨師の仕事として出獄後の更生事業にまで視野に入れながら行っている事業を評価したものである。周知のように北海道バンドの人々は、監獄改良の一環として、刑が終了した人物のサポート、いわゆる出獄人保護事業（更生保護事業）にも関わっていた。とりわけ原はこの問題に大きな関心をもっていた。囚徒にとつて出獄後の生活再建が大きな課題であつたことはいうまでもない。

(三) 北海道集治監教誨師試問会をめぐる

一八九三（明治二六）年一月七・八日、「北海道集治監教誨師諮問会」が樺戸で開催され、大井上輝前典獄から教誨師たちに一四項目の諮問があつた。この会の出席者は阿部の他、原胤昭、水崎基一、留岡幸助、末吉保造、大塚素、中江汪の合計七名であつた。大井上の試問に対し、出席者はそれぞれの所見を述べた。この試問会について「北海道集治監教誨師諮問会録事」として『監獄雑誌』五一―（一八九四年一月二五日）から五一―四（同年四月三〇日）まで教誨師メンバーの回答が掲載されている。試問と阿部の回答の幾つかを掲げておく。

第一項で宗教と道義の教誨方法について「今日の状態にては直に宗教的教誨を監獄に採用するの困難多きか故に道義的教誨を取るの利ある」と回答している。そして第二項と第三項は、監獄の敷地内、近傍に樹木等の風致について、囚徒の感化に有益かどうかを問われたが、自然にある風致として阿部は肯定的に回答している。

「第六項 囚人の親戚へ囚人改悛の状を告げ親戚の調和を計り出獄後生計の準備なさしむる等の必要あるときは教誨師より直接其親戚へ通信をなすの可否如何」。

この設問に対して阿部は「囚人の親戚へ囚人改悛の状を告げ、親戚の調和を謀り出獄後生計の準備をなさしむる等の必要あるときは、教誨師の公務として其親戚へ通信をなすを可とす、其理由は教誨感化の目的を達する有力なる手段なればなり」と答えている。

「第七項 内務大臣指示獄務概則により囚人を区分して総囚教誨を施す其区分の方法如何」。

この設問に対して阿部は「獄務概則に指示せられたる総囚教誨の区分は我集治監に於ては行はれ難きことなりと思惟す、何となれば各監千有余の囚人を拘禁せるに此多数のもの、性情行情を区分せんとするに如何なる標準を以てすべきか是至難の業なり」と疑義を呈し、「故に思へらく総囚を適当に区分することはなし難きことにして、之を為し得るも現今の総囚教誨より一層適切なる教誨は望むこと能はずと、依て願くは我集治監は特別を以て従来の如く総囚教誨を存するを得んことを」と苦渋の答えをしている。

一方、阿部は教誨師の業務をしながら、キリスト教の伝道活動にも貢献した。一八九三年二月の『基督教新聞』「北海道通信」の「石狩市来知」^[22]に以下のような報告がある。

演説会当地近來の模様は頑迷なる国体主義無智の人心を煽動し屢々仏教演説舍来りてキリスト教を冒罵し頻に愚

民を惑はせし折柄なれば幸ひ今回北海道集治監教誨師会議に來られたる網走の阿部政恒、標茶の大塚右金次の両氏を聘して去る廿一日夜新會堂にて演說會を開きたり、同夜の司會者は塩見孝二郎氏にて留岡幸助氏開會の趣旨を述べ夫より大塚、阿部の二氏順次登壇して演說せられたり聴衆殆んど百名斗りにして頗ぶる敬聽したる有様なりき其後の評判に好き方なれば察する所今回の演說會は大に人心を警醒せりと思はる

ここに登場する大塚右金次（大塚素）は釧路集治監（分監）に赴任した教誨師で、典獄の有馬四郎助をキリスト教を導く大きな役割を果たした人物で、阿部の後輩にも当たる。⁽³³⁾

第一回冬期学校は一八九四年三月、市來知で開催され成功裏に終わったが、第二回の冬期学校は九五年一月八日から、岩見沢にて開催された。ここで阿部は一月一三日午前九時半からの講話を担当し、その骨子は「予言者イザヤの時代其予言者等を略説し其所感を述べらる」⁽³⁴⁾と報じられている。

三、教誨師時代の阿部の論文をめぐって

(一) 『同情』に於ける論文

原胤昭やキリスト教教誨師、大井上輝前、監獄の官吏、キリスト者たちによって「同情會」という組織が誕生する。この會は一八九二（明治二五）年から『同情』という雑誌を刊行するが、この雑誌に阿部は創刊号から投稿し、「明治二十五年を迎ふ」（巻頭論文）という論文を長陽外史の号をもって執筆している。『同情』は四号まで刊行し、五号からは『教誨叢書』と改名される。ともあれ、この『同情』誌に掲載された阿部の論考をみておくことにしよう。論

説は「明治二十五年を迎ふ」（一号、九二・一）、「監獄は一の学校なり」（二号、九二・二）、「無形の財産」（三号、九二・三）であり、「伝記」という欄に一号から三号まで「ジョン、ボンヤンの伝」を掲載している。三篇の論考は性格からいずれも囚人に語りかける、いわば教誨であり、教誨師として語ったものかもしれない。この三篇を簡単に紹介し彼の囚人への語りを確認しておく。

最初の「明治二十五年を迎ふ」（一号）は新年を迎え、一年の計を語るに相応しい囚徒への内容となっている。「ア、皆さんよあなたがたは別に新衣を着る事もありますまいが、口では互に御芽出度とお祝なさつたであります。シカシ私は前に申した通り皆さんが旧人と其行を脱て新人を着たまわねばお芽出度とは申しません。なぜならば国会も開け、教育も進み、風俗も改良して、文明開化に進行く大御代の、廿五の春を迎へし祝筵に、彼の豕の如く旧き性根を出してドシ／＼荒廻はられては折角御馳走にと心を尽して塩梅したる、財貨や、秩序や、風俗は、大損害を受、文化の花も散る様な事が起るかも知れません、オ、皆さん衣服は替らなくてもドウゾ其心を入替へ、彼の老人の囚徒の如く新しき心を以て新しき年を迎へたまえ」と。

二号の「監獄は一の学校なり」（二号）は、タイトルからも窺えるように、監獄を学校と譬喻し囚徒に諭したものである。それは書生が学校で他日世の中に出て、良き働きをするために学ぶと同様、「監獄の書生たるものも、他日娑婆に出て良民となり、正当の業を営み正しき暮をするの準備をする事が肝要です」と囚徒に語る。その為に三つの準備が必要である。第一は仕事に勉強する習慣を付けること、二つ目として艱難に打勝つの気象を養うこと、三つ目として目の前の小利より後々の大利を考えること、と説いている。そして「他日良民となるの準備をする精神があれば、厳しい規則も苦しい働も、万事万端我心と体を練り鍛ふ助けとなりまじやう、而して優勝劣敗の世の中に立ち、後れを取る様な事はありますまい」と語る。まさに監獄は「良民形成」への、良き学校のごときものであると説

く。

「無形の財産」(三号)では、阿部は無形の財産、即ち信用という財産を蓄えることを語っている。信用あってこそ財産も形成できるものであり、その信用は大きな財産である。そのためには、第一に小事といっても忽せにしないこと、第二に約束を確く守ること、第三に愛心が必要であること、と説く。この「愛心」とは「弱き者は助け、貧き者は恤み、知らぬ者には教へ、哀む者は慰めると云ふ様に、親切な心ある人は必ず信用を得ます、愛ほど人の心を動かすものではありません、愛は信用を得るの引力と云ふて宜しい」と説明し、「有形の財産を貯蓄すると共に此無形の財産を貯蓄せられん事をお勧めいたします」と論じている。このように平易な言葉と例をあげながら、囚人たちに改心と自立の道を語る。

そして三回にわたって掲載した「ジョン、ボンヤンの伝」は、『天路歷程』の作者ジョン、ボンヤン(バニヤン)(John Bunyan)の簡単な伝記である。阿部が『天路歷程』の内容でなく、作者の伝記を掲載した意味は「ボンヤンは才智鋭敏記憶確かにして、殊想像力に富めり、青年の時代は肉の快樂に耽りて其品行を敗壞し、復高尚清潔なる樂あるを知らざりしが、一度悔改しより以来、人物全く一変し心志高潔仁愛に富み、其胸中確然奪ふ可からざるものありし嗚呼ベッドフォールドの一罪奴、天の靈泉を掬して君子も遠く及ばざるの偉人となれり、天下復た改まらざるの罪人なし矣」と記す様に、如何なる人間でも回心の可能性があり、立派な人間になれることを伝え、囚徒への励ましとしたかったことによるのだろう。

(二) 『教誨叢書』に於ける論文

『同情』が『教誨叢書』に変わってからも、阿部は該誌に多くの論文を発表している。それを列挙しておくとして以下

のようになる（カッコ内は号数と刊行年月）。「放免と真の自由」（七号、九二・七）、「一休の通りた橋」（七号）、「アブラハム、リンコルンの伝」（九号、九二・九）、「アブラハム、リンコルンの伝（続）」（一〇号、九二・一〇）、「アブラハム、リンコルンの伝（続）」（一一号、九二・一一）、「アブラハム、リンコルンの伝（続）」（一二号、九二・一二）、「使徒約翰の伝」（二三号、九三・一）、「火と感情」（一四号、九三・二）、「使徒約翰の伝（続）」（一五号、九三・三）、「使徒約翰の伝（第三回）」（一六号、九三・四）、「使徒約翰の伝（続 第四回）」（一八号、九三・六）、「囚人の独想」（一九号、九三・七）、「使徒約翰の伝（第五回）」（一九号）、「楠正成公」（二〇号、九三・八）。筆者が読むことが出来たのは後述の論文を含め、約二〇篇である。ここでは代表的なものに限って数篇紹介し、彼の教誨にかける思想、囚徒への向かい方を見ておくことにしよう。

「放免と真の自由」（七号）は「放免、放免と放免にさへなれば、自由ありと思ふ事なかれ、娑婆、娑婆と娑婆にさへ出れば楽ありと思ふ事なかれ」と言うように、社会に出ることは確かに自由になると思うけれども、そのような樂觀を棄てるべきであると論ず。実際の社会は複雑で色々と苦しい現実もある。「此世の苦樂は実に其人のこころ次第にあるものなり」と指摘するように「一時の放免は真の放免にあらず一時の自由は真の自由にあらず、汝は如此放免と如此自由を悦ぶか、考なしと云ふにも程あり、如此明白なる利害得失を覚られぬ事なかるべし、心を落付て考へ、篤と考ふべし、真の放免真の自由を得ると否とは、今日の汝の心次第によるものなり」と。目出度く監獄を出て行く時、社会の厳しさ、そして日頃から心の準備に勤しんでいくことの大切さを説いている。

「火と感情」（一四号）は「実に火ありて而して人は其生命を全ふし、火ありて而して社会は其幸福を保つ事を得る者なり、然りと雖も若之を駕御するの道を失ふ事あらんか、其効用弘く其益大なる火も、暴威を逞ふし焼天の大火となりて、忽ち数万の財産を灰燼に帰せしめ、焰煙天に漲るの火となりて、忽ち山野を焼蕩し人畜を害する事甚しかる

べし」と、火には人間にとつて有益な面と往々にして害なる二面性がある。それと同様に人間の感情についても、「人若主人とならずんば物必ず人を奴隷となす」、飲食然り、資産然り、智識然り、權勢然りである。「人若し天の理に従つて此等の感情を使用し、良心の命を守りて之を制する時は、感情は其人の良僕をなりて能く其主命に服し、産を興して家を富ましめ、位を高ふして其身を榮へしめ、智を開きて其心を広くし、徳を厚ふして其品性を高ふせしむべし」と、そして「嗚呼感情も亦火の如く、之を制する時は善き僕となり、之に制せらる、時は兇猛なる主人となる者と云ふべし、豈慎まざるべけんや」と火の裏表同様、感情にもそれがあつて、如何に人間の感情の持ち方の大切なるかを説く。

「囚人の独想」(一九号)は或る囚人の故郷を思うが故に、新しく生まれ代わることが出来ず悶々と暮らしていた例を引き、キリスト教に導かれて、生まれ変われる喜びについて論じている。「神の恵は至らぬ隈もなし、獄吏の一室に拘禁せられ永く配所の月を眺めて暮せし哀れなる此囚人も、今や神の光りに心を照され新に生れるの決心を起してより以前に引換へ前途の望確實になり、心の奥より力の湧くが如く、日毎に喜び勇みつ、服役せしが、遂に無事出獄の榮を得て、公けに自の信仰を言頭はし、神の教会に加はり幸福の一生を送りけるとぞ 此話を讀む人如何に感じけん、諸子も亦新に生れる事を要しぬべし、心して読ねかし」と。

ところで阿部は行刑の専門誌である『大日本監獄雜誌』にも執筆している。例えば「教誨の目的」⁽⁸⁾という論文では「監獄教誨の目的を論明確立するは教誨の重任を希ふる者の急務なり、胸中未た一個の目的を有せずんば千言万語の説教も丁寧反復の訓誨も一貫の主意を失ひ徒に勞して其効を奏すること難からん」と教誨の大切さ、言葉においても有効な物にならない限り、その教誨は無に帰することになる。そのためには如何に囚者に伝えていくか、その重要性を述べた。

然らば即ち教誨の大任を負ふ者の為す所果して如何緘囚教誨と個人教誨とに論なく其説教其訓誨其誘導の鋭鋒を罪囚の心意の上面向け満腔の精神を此処に注ぎ彼等か心内に蔓れる罪草に火を放つにあり、彼等の心内に正義仁愛のダイナマイトを投ずるにあり、彼等の心内に未だ曾て夢視だもせざりし大革命を喚起するにあり、而かも教誨師の責は未だ之を以て尽きす其破裂の結果をして宜しきに導き其革命の歩みを助導して遂に国家の良民天に対するの義民となさゝる可らず、其責任は只監獄の内に於ける事のみ止らず其監獄より生みたる改過遷善の嬰兒の成長如何こそ至大なる責任の存する所なりと云ふへし

阿部は「彼等か心内に蔓れる罪草に火を放つにあり、彼等の心内に正義仁愛のダイナマイトを投ずるにあり」と、かなりストレートな表現をしながら、囚徒に対して「改過遷善の嬰兒の成長如何こそ至大なる責任の存する所なり」と「教誨の目的」を論じた。換言すれば阿部の教誨師としての覚悟、囚徒を「国家の良民」「天に対する義民」への成長に向かわしめる責務を述べたものと言える。

四、教誨師の辞任―キリスト教伝道

(一) 教誨師の辞任

「記念之筆跡」には「廿七年四月上旬より咽喉加答兒に罹り治療其効なく残務を十分尽す能ハさるにより後任者として中江汪君を招き、十月六日を以て辞職す同年十月九日網走出帆一四日小樽着札幌江別岩見沢等を経て歌志内に着茲に伝道に従事することになれり」とあるように、辞職後はキリスト教伝道を中心の生活へと変化していく。阿部は

『教誨叢書』に「告別の辞」を掲載する。その冒頭は「在監の諸子よ余は今不幸にして諸子と袂を分ち復親しく相接して胸懷を吐露する能はざるの哀むべき場合に遭遇せり」と記し、次のように述べている。この文章は阿部の囚人への接し方もよく表現されており、少し長い引用となるが労を厭わずみておくことにしよう。⁽⁹⁶⁾

回顧すれば余の此分監に來りしより今に至るまで二年有半、日月を経ること多からずと雖も常に諸子に近接し日として諸子を思はざるなく諸子をして心靈と肉体との救を得しめんが為に余の能力の及ぶ丈を尽したり諸子亦余の不肖を以てすることなく其説く所に耳を傾け誨ふる所を服膺し自制自立の志を起すに至りしは実に余の喜悅措く能はざる所なり然るに余や本年四月以來咽喉の病に罹り發声自由ならず意の如く諸子に対して教誨を施すこと能はず治療亦其効を奏せざるにより遂に此職を辭して閑地に就き徐ろに音声を養はんと欲す夫れ一樹の陰に息ひ一河の流に汲むも猶天縁の存せざるなきにあらず況んや道によりて相砥礪する者に於てをや余諸子と接すること久しく諸子を思ふこと切なりしを以て別に臨み情懷押へ難きものあり是豈天縁ありて然らしむにあらずや嗚呼今よりは親しく諸子の起居動作を見ること能はず諸子の志を立て道を守り奮勉砥礪するの状を見ること能はず而して又諸子が多年の服役を終り満胸の希望を抱きて世に出づるの榮を見ること能はず遺憾何ぞ之に過ぎん然りと雖も經驗と學識と信仰に富める中江先生が余に代りて諸子を教誨せらるゝを思へば先きの遺憾は變じて諸子の幸福を祝せざるを得ざるに至る諸子若し先生の教を傾聴し其戒を守り其導きに從ひ心を開きて先生に學はゞ其余に學びしよりも得る処倍蓰^{ばいし}せん果して然らば余は諸子に別れて却て幸福を諸子に与へしものと云ふべし

そして最後に「今や秋氣天に満ち人心自ら肅然たるの候諸子と相別る感想又自ら倍する者あり窃に思ふ此情長く心

中に印して忘る、能はず諸子の形影常に余が胸間に往来するならんと諸子亦記する処あるや否や余は此堂に於てまのあた面り諸子に別れを告げんと欲せしも汽船出帆の時刻迫まりて余が此処にあるを許さず是に於て筆紙を借りて聊か余が胸懷を陳す情余りありて辞に尽し難し諸子請ふ之を諒せよ」と最後の別れを惜しんだ。

このように、阿部は咽喉の病氣という如何ともし難い原因のため、教誨師の職を辞せざるを得なかった。この惜別の情と思われる文章から、彼の眼底には囚人たちへの想いが「嗚呼今よりは親しく諸子の起居動作を見ること能はず諸子の志を立て道を守り奮勉砥礪するの状を見ること能はず而して又諸子が多年の服役を終り満胸の希望を抱きて世に出づるの榮を見ること能はず遺憾何ぞ」といった表現で吐露され、彼の囚人への眼差しが窺え、慚愧の至りの心境であった。後任には同じ同志社出身の中江汪に譲ることとなる。³⁷⁾

（二）その後の『教誨叢書』と『獄事叢書』の論文

一八九四年秋に網走分監教誨師を辞職してから、阿部は歌志内で伝道をしていたが北海道空知教会を牧する活動を依頼され、近郊の伝道に奔走することになる。³⁸⁾ また『教誨叢書』に上述した「告別の辞」と共に「時期近く出獄する人に与ふる書」(三四号、九四・一一)「信仰実験録」(三六号、九四・一二)、という小論を掲載している。その後も「責奢侈」(三九号、九五・三三)、「寡婦救はれて平和を得」(四一号、九五・五)、「北海美談 恵まれし家」(四三号、九五・七)等の小論を発表する。それらつき、如何なる内容であったか少し触れておこう。

先ず「時期近く出獄する人に与ふる書」(三四号)であるが、これは刑期を終え、出獄時の心得につき、重要な三点を挙げる。一つ目は「僥倖を頼むの心は断然切棄ていくこと」にある。「当にならぬ僥倖は頼みとすることなく、天は自ら助くる者を助くとの語を守り、自分の腕を以て自分の運命を定める」ように努力しなければならない。二つ

目は「金銀を以て快樂を買はず、務を尽して快樂を得るの御精神を要」すと提言する。「抑人は己が務を尽しさへすれば、快樂は尽きざる者にて、我は我務を十分尽せりと思ふ時は、良心我を褒揚し、心広く体胖かに云ふ可らざるの樂有之候、斯る時には天地万物我ために快樂を与ふる」と説いている。三つ目では「上辺を飾りて出獄人たるを掩ふは、抑過ちの初め」であり、注意すべきであると論している。そしてこの三条は「明年御出獄の期も瞬く間に来り可申候間、今日より十分熟慮の上」、日頃から心に準備に怠りがないように注意専一すべきと提言している。

「責奢侈」（三九号）では、「嗚呼奢侈よ汝は是紛粧せる悪魔よ能く人に近づき能く人を騙し而してよく人を亡す者なり汝は実に人生の誘惑者なり汝の目は人の心の迷はさんが為に常に輝き汝の足は人の財を奪はんが為に疾し汝なかりせば人は如何に清楚に世は如何に簡潔なりしならん」と、奢侈が人の人生までも亡ぼしていく「悪魔」であると主張する。それを奈良時代から鎌倉、安土桃山、江戸時代に至るまで、時の権力者がの実例を挙げながら論じ、「嗚呼奢侈よ汝は実に世を乱り民を苦しめたり汝の為に宋社を覆し其身を亡せし者古今幾何ぞ汝の罪天地に容れざる所なり上帝の台前に立の日汝それ之を如何せんとするか」と問う。

「寡婦救はれて平和を得」（四一号）は一人の女性（寡婦）の話である。「此婦人は信仰益進みて、身を慈善の事業にさ、げんとの志を起し、或看病婦学校に入り、看護の法を学び、恙なく其業を終へて、今は病者の友として働きつ、あるなり」と、キリスト教を信じることよって大きく人生を変えていった良き例として論じている。

ところで一八九四（明治二七）年四月から新しく『獄事叢書』という月刊誌が刊行される。これは主に監獄官吏を対象として刊行された雑誌である。阿部は辞職前後、この雑誌に「倫理学一班」（五号、九四・八）、「倫理学一班」（六号、九四・九）、「古代の大赦令」（一四号、九五・一一）の三箇の小論を執筆している。「倫理学一班」（五・六号）は「身を獄務に奉ずる者殊に罪囚に直接する者に於て倫理を弁ふる事の切要なるを余や茲に倫理学一班と題して本誌

に掲ぐる所以のもの他なし」（五号）とし、囚者と関わり罪囚を教導し良民へ復帰させるていく、そのためには智、情、意の三つを兼ね備えた「道義的人物」が条件となる。「吾人幸に智情意の三者を具有し道義的人物として世に立つものなり請ふ道義上の責任を国家のために力を致さん」、そして「智能によりて生涯の目的を識り感情によりて福祉を感じ意志によりて自由の選択をなすものを称して道義的人物といふなり（余か師）」（六号）と結語している。

また阿部は教誨師時代、辞職した後も米国に遊学した留岡とは時に応じて書簡を交わしていた。教誨師としての責務を最後まで気につけて、最後まで日々の労働と伝道に尽瘁した。

（三）空知地方でのキリスト教伝道

阿部の『基督教新聞』に掲載された「北海美談 恵まれし家」は北海道の山深き所に移り住み、家族一同、過去の困難に耐え、信仰に生き、貧しい乍らも幸せに暮らしている一家の生き様を論じた文章である。³⁶

人生の幸福は富にもあらず、爵位にもあらず、若富と爵位によらずば幸福なしとせば、世上幾多の無位無爵の輩、貧賤の徒は、遂に人生の幸福を味ふこと能はざらん。されども天は斯る偏頗の配剤をなさずして、家庭の清潔喜樂を以て、真正の幸福となせるこそ賢けれ。神に事へて敬虔、父子相信じ、夫妻相愛し、而して児童温順なる家族は、実に現世の天国と謂つべし。余は之を天見川の岸鬱として茂れる樹林の下、茅舎の中に発見せり。余は予て此家族に付て伝聞きしこともありしかど、自ら此家に宿りて家族の者と相接するに及んでは、胸間覚す歎美の感勃々湧出たりき。

このように、幸福とは何か、それは貧しくとも家族が互いを信頼し日々の生活を守りながら、町からも隔たった山村の茅屋に暮らしている家族を描いている。いわば、若年ながら阿部自身の行き着いた人生観、生き様にあるように思われる。

最後に阿部が教誨師辞職後、既述したように空知地方の伝道に関わったことをみておこう。札幌教会より分離し、留岡幸助を牧師として空知教会が設立されたのは、一八九三（明治二六）年十二月のことである。しかし翌九四年春、留岡は遊学の為め米国に渡る。空知教会は近辺の奈井江、岩見沢や歌志内も当教会の伝道地として牧する。同年一月、阿部は歌志内に着く。九五年阿部は歌志内より空知に移る。翌年、奈井江に講義所が設置され、阿部は空知教会に転入している。九七年、教会員も減少し且つ七月に阿部は病気のため辞職する。その後、岩見沢教会が設立、空知教会と合同となる。九七年一〇月、阿部は札幌教会に転会する⁽⁴⁰⁾。阿部の空知地方とその周辺での伝道活動もうまく行かなかったのは、彼にとつてきわめて残念なことであった⁽⁴¹⁾。そして阿部は九八年秋頃より体調を乱し一二月一日に三四歳の生涯を閉じたることになる。

結びにかえて―阿部の召天をめぐって

一八九四（明治二七）年一〇月、病気にて辞職したが、その一年後、仲間であった原や水崎たちも連袂辞職し、北海道から引き上げていった。残った阿部は中江汪らと共に伝道事業や鉄道の仕事を続けていたが、彼の病状は次第に悪化していく。その後、教誨師辞職四年後の九八年秋頃より、重篤化していった⁽⁴²⁾。そして運命の一二月一日となる⁽⁴³⁾。

是レヨリ先キ数日既ニ再ヒ起ツベカラザルヲ自覺シ病苦ヲ忍テ遺言ヲナシ又親友ヲ招キテ訣別セリ其情実ニ斷腸
 惻胆ニ堪ヘズ而モ自身ハ平和ニ満チテ心ヲ安シ天津国ニ歸リ先テル聖徒ノ群ニ集ヒ得ルヲ喜ベリ臨終ノ前日マデ
 ハ精神猶過敏ニシテ氣力明確ナリシガ当日ニ至リテ漸ク茫々惘々タルニ足レリ今ハ早ヤ皮下注射ノ藥力ニ依リテ
 病苦ヲ忘レ又僅ニ余命を保ツノミトナレリ当日ハ死期愈迫リタルヲ以テ親友モ来リ護リタリシガ午後十時ニ至リ
 三十五年ヲ一期トシテ聖キ使ニ導カレツ、平和ノ雲ニ囲マレツ、永遠ノ花咲キ香フ天津御国ニ入り永眠不覺ノ骸
 ヲ横ヘ又嗚呼悲ヒ哉

かくして彼の生涯はここに終焉し、聖徒の待つ天に召されていった。

阿部の葬儀は一八九八（明治三一）年十二月三日午後、札幌組合教会にて営まれた。その模様は「中江汪氏ハ履歴
 ヲ述ベ牧師田中兔毛氏ノ説教、内田政雄氏ノ弔辞渡辺守成氏ノ弔文蜂谷芳太郎氏ノ弔句アリ新田義正ハ遺族ニ代リテ
 挨拶ヲナセリ会葬者ハ教會員及鉄道部員等ニシテ約八九十名アリ門外ニ於テ一同撮影シテ紀年ノ資ニ供セリ後送リテ
 豊平共同墓地ニ葬レリ」と。原田助（神戸）や田辺朔郎（鉄道部）ら阿部の関わりのあった人々から多くの弔文の電
 報等が届いた。

阿部は三四歳という短い生涯は閉じたが、生涯、クリスチャンとして信仰に生きた人生であった。若くして神戸教
 会にて受洗し、同志社で学び二八歳にて北海道に渡り監獄教誨師として三年間、その後は体調を崩し、北海道に残り
 三年はキリスト教伝道北海道庁での鉄道の仕事等に費やした。この自然豊かな地で神と共に生きる道を選び、何より
 も家族の平和を願う人であった。彼の大きな仕事であった教誨師生活の辞職を決意し、愛すべき囚徒たちへの惜別の
 文章は彼の人間としての生き様を象徴しているように思われる。短い人生ではあったが「北海道バンド」として大き

な功績を残した人物の一人である。死に際に「故郷ニ親モナク親族モナキヲ思フテ読メル歌」として「帰ルベキ我カ故郷ハ教ノ友 群レツ、遊ブ天津国ナリ」という歌を残している。彼は遠い故郷に思いを馳せながら、「教の友」との再会を夢見ながら天に召されていた。

(注)

- (1) 「北海道バンド」という名称については生江孝之『日本基督教社会事業史』（教文館、一九三二）があり、明治二〇年代の北海道集治監でのキリスト教教誨師たちの活動について呼称されたもので、一定の定着された言葉である。小池喜孝『鎖塚』（現代史資料センター出版会、一九七三）や最近の研究である赤司友司『監獄の時代』（二〇二〇、九州大学出版会）等でも使用されている。
- (2) 例えば「北海道バンド」の名付け親と称される生江孝之も前掲書『日本基督教社会事業史』で監獄改良に貢献した人物として阿部の名を挙げながら、彼の事績について「明治二年同志社卒業」（二二六頁）としか触れられていない。
- (3) 遺族から阿部政恒に関する貴重な史資料が寄贈されたのは、二〇〇三年のことであり筆者が『同志社談叢』二五号（二〇〇五）で知ったのは最近のことである。
- (4) 以下この資料については「阿部政恒関係資料」とする。
- (5) 『基督教新聞』八〇〇号（一八九八年二月一六日）。ちなみに留岡はこの新聞の編集責任者でもある。また阿部は「長陽」「長陽外史」という号を持っている。彼の論文や消息はしばしばこの号でもって執筆されている。
- (6) ほかに研究史として重要な文献（著書）は、重松一義編『北海道行刑史』（凶譜出版、一九七〇）、重松一義『史料北海道監獄の歴史』（信山社、二〇〇四）、高塩博・中山光勝編著『北海道集治監論考』（弘文堂、一九九七）等の行刑史関係、大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』（吉川弘文館、一九七九）、福島恒雄『北海道キリスト教史』（日本基督教団出版局、一九八二）等の教会史関係、教誨史としては『日本監獄教誨師史』下巻（真宗本願寺、一九二七）、最近の研究として、繁田真爾『悪』と統治の日本近代（法蔵館、二〇一九）、赤司友徳『監獄の時代』（九州大学出版会、二〇二〇）等があり参照した。
- (7) この資料は表紙に「明治二十八年七月起 全三十九年二月廿一日 終歌志内より市来知に経る 第拾四號 記念之筆跡 長陽外史」

- (以下「記念之筆跡」とする)と毛筆墨筆で認められ、上部が和綴じのものである。
- (8) 「阿部政恒関係資料」の前掲「記念之筆跡」の冒頭には「阿部家系図」となっているが、それには「明治十五年春難あり蔵書類散逸し系図の行衛遂に明かならず」とある。阿部家の第八代の政顕の死(嘉永六年癸丑七月三日)、そのため研三が阿部家の家督を継ぐ。研三は長野政直の四男(政恒の兄)であった(政恒は七男)。また政恒は一八七六(明治九)年九月廿七日に研三の嗣子になっており、研三が一八七九(明治十二)年に七月二日に死去したため(妻のタミも同年七月六日に死去)、そこで政恒が阿部家の一〇代として、阿部家を嗣いだと思われる。ともあれこうして政恒は阿部政恒となった。
- (9) 以下、引用は「阿部政恒関係資料」中の「記念之筆跡」。
- (10) 「明治十六年十一月四日 神戸教会ニテ受洗 阿部政恒」(「記念之筆跡」)とある。ちなみに洗礼を受けた松山高吉(一八四七〜一九三五)は、七四年に撰津第一公会(神戸教会)の牧師に就任している。教派合同運動にも関わった。
- (11) 留岡が同志社に入学するのは、彼の日記から一八八五(明治一八)年一月初めのことである(拙著『留岡幸助の研究』一一一一〜一二頁参照)。したがって阿部より三カ月遅い入学となっているが、卒業は同時期となっている。ちなみにこの年から別科神学課程は四年間となっている。
- (12) 当時の同志社の学生生活は徳富蘆花の小説『黒い眼と茶色の目』(『蘆花全集』一〇巻)にも詳しく描かれている。留岡も「富岡」として登場している。
- (13) 有名な「同志社大学設立の旨意」『新島襄全集』第一巻(同朋舎出版、一九八三)には「一国の良心」という同志社教育のキーワードが唱道されている(一一二頁)。
- (14) 『同志社文学』という雑誌は同志社文学会によって一八八七年から刊行された雑誌で、キリスト教に関する内容が多くを占めているが明治期の一種の思想雑誌とも称せる内容である。
- (15) 『新島襄全集』第九卷上(同朋舎出版、一九九四)四一七〜四一九頁。これについては拙著『留岡幸助の研究』(不二出版、一九九八)一三四〜一三五頁に全文を紹介しているので参考されたい。
- (16) 『留岡幸助日記』第一巻(矯正協会、一九七九)三三三頁。
- (17) 神戸教会については神戸教会編『近代日本と神戸教会』(創元社、一九九二)を参照した。
- (18) 『新島襄全集』第三巻書簡編1(同朋舎出版、一九八七)六六三頁。また前掲書『新島襄全集』第九卷上には、長田時行と阿部両

名の新島宛て書簡に、具体的な家借り受けのことが記されており、隙間を塞がせ置く等の条件が示されている。ともあれ、新島のた
めに良き家を探索していることが報じられている(四六七頁)。

- (19) 『新島襄全集』第九卷上(同朋舎出版、一九九四)四七〇―四七二頁。
- (20) 浪花教会については芹野與太郎編『浪花基督教教会略史』(浪花基督教教会略史、一九二八)を参照した。
- (21) 大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』(吉川弘文館、一九七九)二二三頁。
- (22) 『基督教新聞』四三二号(一九九一年一〇月三〇日)。
- (23) 当時宮崎に一時寄留し、起居していた阿部が樺戸に招聘した経緯はわからないが、留岡の進言があったのかもしれない。ちなみに囚徒深井卓爾は自由民権運動の一つ群馬事件で樺戸集治監に収監されていた人物である。当時の典獄が大井上であった。伴野外吉『獄窓の自由民権者たち』(みやま書房、一八七二)参照。
- (24) 繁田真爾は大井上が大谷派教誨師たちを「謝絶」し、阿部を招聘したことが「仏教界との確執の深まり」とし、後の大井上の非職に至る一因であったと論じている『悪』と統治の日本近代』(法蔵館、二〇一九)二二二頁。
- (25) 留岡は一九九一年九月二三日から一〇月二八日まで一ヶ月以上北海道東部地方の視察の旅を続けている。その旅「羈旅漫録」については、拙著『留岡幸助の研究』(一九一―一九三頁)を参看されたい。
- (26) 竹内(馬場)種太郎(一八六三―一八九三)は岡山県邑久郡の出身で、大阪教会で洗礼を受け、一八八五年に同志社の邦語神学科を卒業している。卒業後は新島の推挙によって札幌と空知地方の伝道に就いた。九二年職を辞して京都に帰ったが、九三年九月、三〇歳の若さで死去した。北海道では「間接に空知集治監及び札幌監獄等の教誨伝道を助け」『基督教新聞』五三七号(一九九三年一月一〇日)とある。竹内が網走行きを断ったことで、翌年春の阿部の網走行きが決まった可能性がある。
- (27) 『記念之筆跡』には「一九九三年七月二五日に「北見国網走郡能取村字ラバラナイの地三万七千五百坪貸下願をなし許可」とあり、一〇月三〇日に「網走発一二月七日樺戸着教誨師試問会に列席一八日会終わりて空知札幌函館釧路等の監獄を経て十二月九日帰着」とある。
- (28) 高塩博・中山光勝編著『北海道集治監論考』(弘文堂、一九九七)三〇一―三〇二頁。そして一九九一年八月、この分監長に就任したのが有馬四郎助である。
- (29) 『基督教新聞』四七六号(一九九二年九月九日)と四七七号(一九九二年九月一六日)。

- (30) 『基督教新聞』四八三号(一八九二年一〇月二八日)。網走には「北海禁酒会網走部会」や「網走基督教婦人会」等があり、九月九日に札幌教会の竹内種太郎と海老名弾正が来て講演を行っている。一日にはコルチスが講義所に海老名は山田製造所と分監において説教したことが報じられている。
- (31) 『監獄学雑誌』四卷三号(一八九三年三月三十一日)。
- (32) 『基督教新聞』五四一号(一八九三年二月八日)。
- (33) 大塚素については「大塚素小論」『キリスト教社会問題研究』四〇号(一九九二)を参看されたい。
- (34) 『基督教新聞』六〇二号(一八九五年二月八日)の「第二回冬期学校報告(続)」による。
- (35) 『大日本監獄雑誌』五四号(一八九二年一月三〇日)。同誌次号においても「監獄教誨と宗教との関係」という論文を発表している。
- (36) 『教誨叢書』三六号(一八九四年二月一九日)。
- (37) 中江汪も「北海道バンド」のメンバーの一人である。この人物については、札幌独立基督教会での伝道活動や留岡幸助日記、当時の『基督教新聞』等で散見できるが、今のところ詳細な事績がわからない。
- (38) 同志社大学人文科学研究所蔵の「湯浅与三関係資料」による。
- (39) この論文は先に『基督教新聞』六一四号(一八九五年五月三日)から六二二号(六月二日)に亘って、六回連載されたものである。『教誨叢書』四三号(九五年七月)にも転載されている。
- (40) 「記念之筆跡」には一八九八(明治三二)年五月七日をもって、「北一条西六丁目一番地ニ転居ス」とある。
- (41) こうした阿部の空知地方の伝道活動や当時の情況は同志社大学人文科学研究所蔵「湯浅与三関係資料」と大濱徹也「明治キリスト教会史の研究」(吉川弘文館、一九七九)を参考にした。
- (42) 「記念之筆跡」には、「乍然衰弱ノ身ヲ以テ将ニ来ルベキ嚴冬烈寒ヲ北海ノ地ニ過スハ最モ危険ナルガ故ニ神戸明石ノ辺ニ転地療養ノ望ミアリタリ長田時行、原田助氏等ハ其事ノ為メニ配慮セラレ」云々と記され、「はじめに」で紹介した留岡の弔文にあった明石静養のことが記されている。
- (43) 二月一日の阿部の危篤の様子や葬儀等については「記念之筆跡」に依拠する。